



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第58号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋 1-5-7
東専堂ビル2階

電話: 03 (6380) 8943

FAX 03 (6380) 8952

<https://ireikyoku.com>

振替口座 00140-6-334930

編集人 圓 藤 春 喜

発行人 國 澤 輝 生

印刷所 SG印刷デザインズ (株)

目次

令和5年度「大東亜戦争全戦没者 合同慰霊祭」のご案内	1
あの戦争を振り返り戦没者の霊を 慰する (第十回)	2
ノモンハン事件	8
(五) ソ蒙軍の8月攻勢と日本軍の作戦 硫黄島における遺骨収集活動について 事務局からの報告等	14
正会員団体令和5年度慰霊行事予定	15
	16

「令和5年度大東亜戦争 全戦没者合同慰霊祭」について

令和2年度に新型コロナウイルス(「デルタ

株)の感染者急増に始まった新型コロナウイルス禍は、オミクロン株等に変異を繰り返しながら感染が拡大してきましたが、ワクチン接種の普及と変異株自体の重症化リスクの低下等により、インフル

エンザと同等の脅威とみなされるようになり、国民生活や経済活動もコロナ禍以前の状態に復しつつあります。

しかしながら、昨年2月に生じたロシアによるウクライナへの侵略は、ウクライナ軍の善戦により、1年を経過しても戦況は一進一退予断を許さない状況にあります。

ロシアは、今後の戦況の推移によっては核兵器の使用もありうるとの威嚇を繰り返して米欧日のウクライナ支援

を牽制しており、今後の戦況推移を慎重に見守りつつ対応していく必要があります。

一方、中国は習近平体制が3期目に入り、ますます軍事力増強と領土的・経済的野心を顕在化させており、米国の覇権争いは、ますます激しさが増しています。

このような状況下ではありますが、令和5年7月8日に予定しています合同慰霊祭は、令和元年以前のように在宅参拝を含め会員各位に広く参加者を募り慰霊の誠を尽くしたいと考えていますのでよろしくお願い致します。

なお、本年度は直会も実施する予定ですが、感染が再拡大した場合は急遽中止させていただきますのであらかじめご承知おき下さい。

(文責 圓藤春喜)

令和5年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭のご案内

当協議会は、当協議会参加団体と共に、令和5年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を左記のとおり執り行う予定です。

記

- | | | |
|----------------|-------------|-------------------|
| 一 時期 | 令和5年7月8日(土) | (参集殿集合…11時40分までに) |
| 二 場所 | 靖国神社 | |
| 三 次第 | | |
| ① 式典・昇殿参拝 | 12時00分～ | 拝殿・御本殿 |
| ② 直会 | 13時30分～ | 靖国会館 |
| 四 参加費 | | |
| ① 式典・昇殿参拝(玉串料) | 2000円 | |
| ② 直会 | 5000円 | |

賛助会員の皆様は、同封の払込取扱票に必要事項をご記入の上、参加費を振り込んで下さい。参加費納入をもって参加申込に代えらるゝもに、式典において祭文とともに御芳名を神前に奉納させていただきます。会員以外の方は、当協議会事務局までお問い合わせ下さい。

〒102-0072

千代田区飯田橋1-5-7 東専堂ビル2階

(公財)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会事務局

電話03-6380-8943

FAX03-6380-8952

Eメール bek05197@nifty.com ホームページ <https://ireikyoku.com>

『あの戦争を振り返り戦没者の霊を慰する』 第十回

東京裁判研究者

元くらしき作陽大学教授

松元 直歳

大東亜・太平洋戦争への前奏曲(Ⅱ)
戦間期の日米中関係から開戦へ

(その5) 満州事変から大東亜・太平洋戦へ…盧溝橋直後の日本の和平努力

平努力

前号第9回稿「大東亜・太平洋戦争への前奏曲(Ⅱ) 戦間期の日米中関係から開戦へ(その5) 満州事変から大東亜・太平洋戦へ…盧溝橋事件勃発」で述べた様に、1937(昭和12)年7月7日、盧溝橋事件が、泥沼となつて長期間にわたつて続くこととなる日支間紛争＝支那事変の開始を告げたのであった。

この支那事変を思い出していくに当たつて、又、この支那事変とは大いに性格の異なる、現在進行中のロシアによるウクライナ侵略戦争に思いを致すために、既に幾度か引用した英国の陸軍軍人にして陸軍戦術の研究者ジョン・フレデリック・フラーの大著『西方世

界の決定的戦闘及びその歴史に及ぼした影響』から、その原著全巻に対する「はしがき」を引用しておきたい。即ち、以下の通りである。

J・F・フラー『西方世界の決定的戦闘及びその歴史に及ぼした影響』

原著全巻に対するはしがき(自衛隊邦訳参照)から

戦争が人類の発展における必要要素であるか否かは議論の余地があるが、人間の最も古い記録の存する時代から現代に至るまで、戦争が人間の常に支配的な関心事であったという事実疑問の余地はあり得ない。人類の歴史上で全く戦争がなかったという期間は決してなく、また1世紀以上もの間大きな戦争を見なかったという事は稀であった。すなわち、大戦争は、恰も潮の満ち引きの様にほとんど規則正しく消長する。

この様は、表見上我々の世界的な産業文明に起こりつつあるがごとく見えるように、文明が歳をとり、腐敗し始める時に、より一層、顕著になってくる。僅か1世代から2世代以前は、戦争は政策の道具であるとして受容されていたが、

今や政策そのものとなった。今日我々は、“戦争的”状態―即ち戦争が人間の他の全ての活動を支配する状態の中で暮らしている。この緊張状態がいつまで続くか、それに対して明確な答えがあるかどうか、或いはそれが盲目的にそれ自身の最後を遂げるべき運命にあるか、誰も判らない。だが一つの事ははっきりしている。それは、我々が戦争の歴史を研究すればするほど、戦争そのものをよく理解することが出来るであろう、という事である。今や戦争が支配的な要素であるという事を知ったので、我々が戦争を真に理解するまでは、どうして我々は人間の色々なことを規制しようと望みうるだろうか。



ジョン・フレデリック・フラー

さて盧溝橋事件勃発直後の極東をめぐる国際関係は、主として、日本と支那―蒋介石の国民政府と毛沢東以下の率いる中国共産党加えて後には汪兆銘率いる新南京政府という三個―の政治主体、米国と英国、スターリン率いるソビエト共産党政権、及びフランス共和国とヒトラー率いるドイツ帝国等の担い手によつて演じられた。

そして象徴的にも実体的にも、盧溝橋事件が支那事変の導火線となつたのであるが、いずれにしろ、肝心なことは、この盧溝橋から支那事変へと泥沼化していく過程への寄与は、日中の各れか一方国によつて担われたのではない、という一事である。日中のみならず日中以外を含む複数の利害関係諸国の公権力と民間人による諸行動によつて、陰に陽に進展せしめられて行つたのである。

この観点から盧溝橋事件の勃発について見れば、その計画者は、中国共産党を操つたソビエト共産主義体制下のスターリン政権と毛沢東指揮下の中国共産党であり、踊らされた主たる演技者は日本と蒋介石率いる中華民国であつたと言ひ得ることを、前回稿で示唆した。

『盧溝橋事件を起した者』への補足

―中国共産党側資料―

本稿は、「大東亜・太平洋戦争への前奏曲(Ⅱ) 戦間期の日米中関係から開戦へ(その5) 満州事変から大東亜・太平洋戦争へ」盧溝橋直後の日本の和平努力」と題する。

さてここで「盧溝橋事件を起こした者」について、大東亜・太平洋戦争終結後の1949(昭和24)年に大陸に成立した中華人民共和国側の資料により、補足して報告しておきたい。

戦後の1975(昭和50)年1月、成祥出版社より、葛西純一編・訳で『新資料 盧溝橋事件』なる一書が発行された。同書の記載によれば、葛西は、1922(大正11)年、宮城県に生まれたが、1940(昭和15)年3月に、満鉄社員(錦州鉄道局承德工務区経理掛)となった。1943(昭和18)年1月には、日本軍の関東軍兵士(阜新独立守備歩兵第13大隊、興城第869部隊)となる。経緯は不明であるが、敗戦後の1945(昭和20)年9月には、「中共軍将校(現中国人民解放軍政治部員、助理軍医、中日語通訳員。連級Ⅱ大尉)」となった。19

53(昭和28)年1月には、医師(武漢市立第3医院小児科)となったが、同年4月に、帰国した。同書の「序に代えて」の中で、氏は語る。「私が盧溝橋事件の仕掛人は中国共産党(北方局第一書記胡服こと劉少奇)であると初めて知ったのは、1949(昭和24)

年10月1日の北京政權誕生直後、河南省洛陽市西宮に駐屯する中国人民解放軍第四野戦軍後械部(兵器爆薬部第三保管処)に現役将校(正連級Ⅱ日本の大尉に相当)として勤務している時であった」と。そして、「中国人民解放軍政治部発行のポケット版『戦士政治課本』(兵士教育用の初級革命教科書)には、次の通り記されていた、と云うのである。

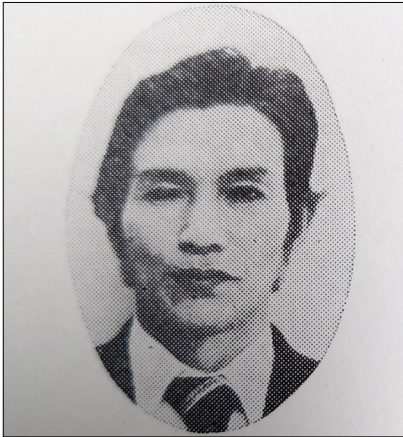
七・七事変(葛西注Ⅱ中国では盧溝橋事件を一般にそう呼ぶ)は劉少奇同志の指揮する抗日救国學生の一隊が決死的行動を以て党中央の指令を実行したもので、これによってわが党を滅亡させようと第六次反共戦を準備していた蒋介石南京反動政府は、世界有数の精強を誇る日本陸軍と戦わざるを得なくなった。その結果、滅亡したのは中国共産党ではなく蒋介石南

京反動政府と日本帝国主義であった。

中国人民解放軍政治部発行
ポケット版『戦士政治課本』

葛西の言葉を借りれば、「そのころ、閉ざされた中国大陸は『人民中国』の誕生にわきかえっていた」という状況に鑑みれば、上の主張が「堂々と述べ」られていたとは、十分に首肯できるところである。

加えて、盧溝橋事件が発生したのは1937年7月7日であったが、その直後の翌8日以降直ちに続けざまに、以下のような複数の電報が、中国共産党側から、各界、中国国民党の蒋介石以下将兵及び共産党首脳に対して、发出された。



葛 西 純 一

電 文	発信時期 (1937年7月)	宛 先	発信名義
(1) 中国共産党為日軍進攻盧溝橋通電	8 日	全国の各新聞社・各団体・各軍隊・中国国民党・国民政府・軍事委員会および全国の同胞諸君へ	中国共産党中央委員会
(2) 紅軍将領為日寇進攻華北到宋哲元等電	8 日	北平宋明軒(哲元)先生、天津張自忠先生、張家口劉汝明先生、保定馮治安先生ご高覧	毛沢東、朱徳、彭徳懷、賀竜、林彪、徐向前、劉伯承

電 文	発信時期 (1937年7月)	宛 先	発信名義
(3) 紅軍将領為日寇進攻 華北致蔣委員長電	8 日	廬山にある蔣委員長ご高 覧	毛沢東、朱徳、周恩来、 彭徳懷、賀竜、林彪、劉 伯承、徐向前、葉劍英
(4) 中国人民抗日紅軍致 電華北当局暨 (=及び) 二十九軍将士快郵代電 万万火急	9 日	北平の宋(哲元)委員長、 保定の馮(治安)主席、北 平の秦(徳純)市長、天津 の張(自忠)市長、万全の 劉(汝明)主席、ならびに 二十九軍全将兵に移牒し て御高覧を仰ぐ	彭徳懷、賀竜、劉伯承、 林彪、徐向前、葉劍英、 左権、肖克、徐海東、な らびに人民抗日紅軍指揮 員戦闘員全体
(5) 中国人民抗日紅軍為 盧溝橋事件快郵代電万 万火急	9 日	廬山の蔣(介石)委員長、 並びにこれを移牒される 南京当局の諸公、西安行 營の顧(祝同)主任及び 何(応欽)副主任、延安 の毛(沢東)主席及び朱 (徳)総指令、雲陽の彭 (徳懷)総指揮および任 (弼(ひつ)時)政治委員、 並びに全国各軍師長のご 披見を仰ぐ	中国人民抗日紅軍第1軍団、 第15軍団、第1方面軍、第 4方面軍、第4軍、第31軍、 第27軍、第28軍、第30軍、 教導師、独立第1師、独立 第2師、74師の指導員戦闘 員全体

(1)の「中国共産党為日軍進攻盧溝
橋通電」

葛西の訳を参照にして記せば、「日
本の盧溝橋進攻に際して中国共産党中
央委員会が全国の各種組織体及び全国
民宛て発した同内容の電報」というこ
とになろうか。そこに呼びかけられた
主たるスローガンは、「民族統一戦線
構築」、その実現の為の「国民党・共
産党両党の親密な合作」であった。

葛西は、次のように注を加えている。
即ち、「電文は7月7日夜10時、と
いわゆる日本軍の先制攻撃時刻を明示
しているが、事実は8日午前5時半の
応戦であり、従ってこの『夜10時』は
劉少奇ら中共中央北方局の地下工作員
が、日支両軍に向けて銃声(爆竹のよ
うな)を同時に浴びせかけ「点火」に
成功したという無電報告によるものと
思われる。日中戦争によるしか党を滅
亡の瀬戸際から救う手段はないとする
中国共産党は、ここでも、『日本侵略
者に一時的な平和の幻想を抱くな』と
声高く叫んでいる。
これでは現地の冀察当局と29軍が日
本側駐屯軍と何ほど不拡大への努力を
重ねても、抗日怪事件が次々と続発し
たはずである」、と。

(2)の「紅軍將領為日寇進攻華北致宋哲元等電」

同じく、「日本侵略者が華北を侵攻するに際して、紅軍將領が、国民党・国民政府側要人である宋哲元らに宛て発出した電報」と言えよう。

宛先の宋哲元、張自忠以下は、中国共産党に対峙していた国民党・国民政府側の要人である。尚29軍は当時、宋哲元の指揮する中華民国軍の一軍である。

内容主旨は、以下の通りである。

「日本侵略者の進攻は全国民を激怒させ、盧溝橋の戦役における29軍の勇敢なる抗戦の模様を聞き、全国民はその後ろ盾となることを願っている。・・・紅軍將兵は満腔の義憤を抱きいつでも出動できる準備をなし、貴軍に従って日本侵略者と決戦を交えんとしている。委員長および全国の友軍が勇敢に敵を倒すよう打電するとともに、右の通り伝達申し上げご教示を仰ぐ次第です。」

然し、「全国民は紅軍を介して中華民国軍に附託し、紅軍は、準備を整え決戦を交えんとしている」としながら、「実は自ら直ちに戦闘に参加すること」を控えている態度であった事は、そ

の後の中共軍の行動事実と前回稿の最後に引用した毛沢東の言説から明らかである。

(3)の「紅軍將領為日寇進攻華北致蔣委員長電」

同じく「日本侵略者の華北進攻に際して、毛沢東、朱徳、周恩来、林彪、葉劍英以下の紅軍將領が蔣介石委員長らに宛て発出した電報」である。要旨は以下の通り。

「願わくば（国民党の）29軍に対し、勇奮抵抗するよう敕命されると同時に、滅亡を防ぐため抗戦するといった（国民党）三中全会の主旨にもとづき、全国総動員を實行して北平・天津を防衛し、華北を防衛し、失地を回復されんことを。全紅軍將兵は委員長（蔣介石）指導のもと、国家に生命を捧げ、敵に対抗して国土と国家を防衛する目的を達成せんことを希望している。以上、事態窮迫せるまま燕辞をつらね甚だ恐縮にたえず、ただ命を待つのみです。」

葛西は次のように注を付す。即ち、「中国共産党は自分で放火しておきながら『火事だ！火事だ！華北丸焼けだ！蔣委員長閣下、早く大命降下を！...』

と叫び、・・・トラの子である紅軍まで捨て子する高等戦術に出た。・・・この捨て子戦術は見事に成功し、この

日から45日後の8月22日、紅軍は晴れて国軍＝中華民国国民革命軍第八路軍に正式に編入された。従って、抗日戦争を8年間戦いぬいたのは『中華民国軍』ということになり、いわゆる共産軍、共産八路軍等の軍隊は、実在しなかったわけである」と。

敢えて筆者が注を付す必要はないであらう。

(4)の「中国人民抗日紅軍致電華北当局暨（Ⅱ及び）二十九軍將士快郵代電万万火急」

同じく、「中国人民抗日紅軍が国民政府の華北当局及び同29軍將兵に宛てて発出した特急電報」である。

内容趣旨は以下の通り。

「7日夜の事実は世を挙げて震撼驚倒せしめるもので、日本侵略者の残虐性と中国を滅亡させようとする野心は残らず暴露された。貴軍は国防の最前線にあって狂暴を恐れず、奮起して抵抗された。その忠義、壮烈なること軍人の模範たるに恥じず。抗日救国の旗印をかかげるわが軍は

矛を枕に出動をまつこと既に一日ならず、誓って貴軍の後ろ盾となるものなり。（われらは）既に国民政府およびソビエト政府（中華）に打電上申し、国民政府が大軍を派遣して貴軍を増援するよう懇願、且つただちにわが軍を国民革命軍と改称し抗日に生命を捧げるべく命令するよう請願した。ここに貴軍に対し熱烈なる慰労の意を表するとともに、貴軍が必ずや忠義をまつとうされ、奮起して国土防衛の光栄ある任務を最後まで持久されんことを確信するものなり。」

葛西によれば、「前日（8日）の通電に続いて、今日は特急電報をもつて29軍をけしかけている。見事、点火に成功した盧溝橋の日中戦争の火が、29軍と日本側駐屯軍の話し合いで消されてしまつては大変困るのであった・・・」。

(5)の「中国人民抗日紅軍為盧溝橋事件快郵代電万万火急」

同じく「中国人民抗日紅軍の各軍部隊が、盧溝橋事件に際して、蔣介石委員長以下の国民党・国民政府側の諸公、ならびに毛沢東以下の中国共産党要人に宛てて発出した特急書簡」である。

内容趣旨は、以下の通り。

「願わくば（抗日紅軍は）国民革命軍に改編され、全国の武装勢力と一体となり救国にあたらんことを期すると共に、ただちに華北に赴き日本侵略者と決戦を行い、華北防衛、失地回復のため徹底的に奮戦すること并希望する。・・・華北危うし。全軍將兵は出動準備を終わり、武器を手にして北上の命を待つのみである。終わりにのぞみ貴命を切に懇願する。」
紅軍の国民政府国民革命軍への編入と蒋介石のその旨の命令を「切に懇願」するものである。葛西によれば、こうしておけば「念願成就『国軍編入』だけは目の前であった。・・・蔣委員長から50万の大軍を差し向けられて殲滅される危険は、ぐんぐん遠のき一安心となる」のであった。

「支那事変」の時期的区分

さて、支那事変について報告する以上、その全容ないしは概容を一瞥しておきたい。堀場一雄著『支那事変戦争指導史』に、主として依拠する。堀場は、旧軍の陸軍士官学校「第34期の三羽鳥」と称され、陸軍大佐として終戦を迎えたが、当該書は、1948（昭和23）年ないし1950（昭和25）年頃、堀場が心血を注いで完成させた

と推断され、関係者により1973（昭和48）年になって初めて、一部補遺を加えて発行された。同書に記されている、防衛庁戦史室の稲葉正夫と原四郎による「堀場大佐と著書の成り立ち」によれば、「陸大卒業後恰も満州事変のとき、参謀本部の枢機に参劃し、次いでソ連、ポーランド等に駐在員たること約三年、この間スターリン治下の共産ソ連特に折柄世界注目の『五カ年計画』の究明に取り組んだ」が、「近代戦争における人と物とに関する科学的根拠に立つ日本の総力戦原論を創案した。ソビエトより帰国後には、

「石原將軍の麾下において、日満産業五カ年計画の推進、国防国策の策定、昭和軍政の刷新等に當った」が、「同大佐の起草した『国防国策案』及び『昭和軍制建設要綱案』を知らずしては、昭和の国防軍事史を語ることは出来ない」という。そして堀場は「支那事変勃発当時参謀本部における戦争指導の主任幕僚であった」。

「参謀本部」とは、旧日本陸軍で「軍令＝統帥＝軍隊の軍事行動に関する指揮・統率ないし作戦・用兵（二ツ

ボニカ）」を掌握する、天皇に対する最高の補佐機関であり、「幕僚」とは、その参謀業務を担務する者であった。当該書は、「支那事変」を時期的に、以下のように分類している。

支那事変の時期的区分
・・・堀場一雄『支那事変戦争指導史』を参照

第一期

1937（昭和12）年7月より1939（昭和14）年3月。
現地解決局面不拡大に関する努力より武力解決の決心に移り、戦局の拡大、南京作戦、徐州作戦を経て、漢口・広東作戦に亘る作戦活発の戦略期間。

第二期

1939（昭和14）年4月より1941（昭和16）年7月。
主として汪兆銘の脱出及び南京政府樹立後に亘る政略ならびに解決施策の推進より大持久戦略への移行を繞る政略期間。
その初期、即ち1939（昭和14）年4月より11月に至る間を、中央政略期間。その後昭和14年12月より16年7月に至る間を、現地政略期間とする。

第三期

1941（昭和16）年8月以降1945（昭和20）年8月に至る

る大東亜戦争間、次等（第二の・二流の）正面としてのその開戦策応より対支新政策への転換、大陸打通作戦、東面戦備を経て終戦に亘る持久期間とす。

本稿では、上記の第一期の期間中、1937（昭和12）年の7月7日の盧溝橋事件勃発直後の日本側の解決努力を追つてみる。主に、チャールズ・カラン・タンシル『裏口からの参戦』、ジョン・トーランド『大日本帝国の興亡』、『堀場一雄』『支那事変戦争指導史』、岡崎久彦著PHP文庫「重光・東郷とその時代」、中村繁『大東亜戦争への道』他を参照にする。



堀場一雄

勃発直後の解決努力から悲喜劇の日支開戦へ

『支那事変戦争指導史』によれば、7月8・9日、日本政府は、現地軍に關しては、「局面不拡大・現地解決方

針」を、陸軍参謀総長より支那駐屯軍司令官宛に、指令した。加えて9日には、参謀次長より支那駐屯軍参謀長宛、「政治問題には触れず、概ね以下の要求を提議すべき旨」を電報で指示する。

(一) 支那軍の盧溝橋附近永定河左岸駐屯の停止

(二) 将来に関する所要の保障

(三) 直接責任者の処罰

(四) 謝罪

そして7月10・11日には、満州の関東軍と朝鮮軍よりの派兵を決定して、当該事変を「北支事変」と命名する。

この間の状況は、堀場によれば、以下の通りであった。

「10日以来支那駐屯軍参謀長橋本(群)少将は、北平(北京)に於いて解決条件折衝中なりしが、11日午後に至り、支那側はこれを受諾せる旨の報告あり。依つて内地師団の動員は一時之を延期することとなりたるも、作戰当局は支那側中央軍北上気配あり。(松元注:ママ。この句点は読点ではないかと推測する)又10日再び龍王廟附近にて彼我の衝突ありたる等現地の情勢に鑑み不覚を戒むるの要ありとし、支那側の条件履行を確認する迄既定の如く爾余の部隊を推

進することとし、関東軍より混成第一旅団、独立混成第十一旅団及飛行六中隊基幹、又朝鮮軍より応急動員第二十師団の派遣方処置す。」

日本軍の橋本群と中華民國軍宋哲元との間の現地干渉は、ジョン・トーランドによれば以下の通りであった。

「盧溝橋では、長時間の困難な折衝が行われたうえで、新しい停戦協定が同意に達した。しかし、両軍が撤退しはじめると、突然、機関銃の発射音に似た大きな音がした(実際には爆竹だった)ために戦闘が再発した。しかしこの時は友人であった宋哲元(第29軍軍長・冀察政務委員会委員長)と橋本群(支那駐屯軍参謀長・司令官代行)の両将が自ら交渉に当たって、その日のうちに内容がきわめて明確な現地協定に調印した。宋はこの協定で、今回の事件について全面的に謝罪している。そして宋は、責任将校を処罰し、共産分子を嚴重に押え、盧溝橋周辺から軍隊を撤退することを約束した。一方、橋本は、死にかかっていた軍司令官(田代皖一郎中将)の代理として、これ以上北支にある日本軍を増強しないことに同意した。」

他方、タンシル『裏口からの参戦』によれば、「日本の軍部は、当初は共產党と国民党の合作の脅威について認識が甘かったよう」である。即ち以下の通りである。

「7月7日の衝突はすぐに収束するだろうと樂觀的に考えていた。なかには、事件の発端となった中国軍による発砲は偶発的なものだったと考える者までいた。日本は中国側に對して理解を示す態度でいただけにすぐに講和となった(7月11日)。

この講和協定は日本(橋本群)と將軍(宋哲元)の間で調印されたものだった(7月19日)。中国側からの謝罪および現場の隊長の処分が決められた。また北部支那での日支協力を妨害する支那官憲の自発的排除および北京周辺からの共産主義者の排除も規定されていた。」

然しながら7月17日、蒋介石は、全国の有力者150名を招いて会議を開催していた避暑地廬山において盧溝橋事件の勃発を報ぜられ、前年1936(昭和11)年の「西安事件」によつて「第二次国共合作」を約束させられていたこともあつたが、中国全土のナショナリズムを掻き立てた有名な声明を発

する。即ち、「盧溝橋の武力占拠を容認すれば、北京は第二の奉天となり、北支は第二の満州となる。―盧溝橋の保全は全国民存亡のかかるところであり、いかなる犠牲を払っても断固抗争せねばならない」とする、対日強硬演説であった。

何れにしろ、先に掲げた国民党勢力に對して事件直後に発出された中国共產党の諸電文に照らして見れば、葛西の云う通り、「宋哲元が日本との現地交渉で平和可決をなし『盧溝橋事件』の火が消えてしまうことは、中国共產党にとつて死活問題なのであつた。従つて華北各地に抗日事件を続発させ、よつて日本の大軍を必ず華北に誘致する戦略は中国共產党にとつて至上命令であつた」のである。

タンシルによれば、盧溝橋事件の勃発は、共產党工作員が、「日中両軍の駐屯事情について偽情報を流し事態の悪化を画策し、クレムリンは日中間の和解を嫌つ」ていた証拠である。岡崎久彦は、「これが盧溝橋事件の事実関係の誤判断に基づくものと考えるところ、事件の発端は悲劇的だった」と、嘆じた。(続く)

ノモンハン事件

(五) ソ蒙軍の8月攻勢と
日本軍の作戦

岩田 司朗

1 ソ蒙軍の8月攻勢

(1) 初動における戦況の概要

ア ソ蒙軍攻勢開始直前の状況

ノモンハン戦場におけるソ蒙軍は、8月下旬、いよいよ大詰めを迎えた欧州におけるポーランド分割を目標とした独ソの接近に呼応して、いささかの狂いもなくその作戦を着実に進める段階を迎えていた。そして、その攻勢を日本軍に秘匿するため、8月中旬はいかにも防御に転じた如く装うことに努め、あらゆる処置術策を講じた。日本軍諸隊においては、両翼側方面に対する動きには、ただならぬものを感じていたようであるが、ソ蒙軍の攻勢開始を看破し、対策を講じた部隊はなかった。なお、8月19日には全線にわたり、ソ軍による航空機の偵察、銃爆撃が活発に行われ、ことに猛爆は夜間にまで及んだ。

師団の最南翼方面においては依然、激戦が継続され、中央方面に比し、ソ蒙軍の動きが活発であった。ことに8月15日以来、744高地付近の上流、

南渡方面におけるその出入が目立ち始め、また19日には、同地並びに744高地南側の東渡付近にはかなりの自動車貨車の集団が見られた。

酒井部隊はバルシヤガル高地の左翼拠点の防御を担任していたが、ソ蒙軍の行動は積極的でなく、爾後の行動についての判断はつきかねていた。

最右翼フイ高地(721高地)正面のソ蒙軍の動きは、17、18日ころから活発になり、特にその第一線警戒が厳しくなつてわが方の斥候の潜入が困難となつたほか、両岸における兵力の移動が激しさを加え、19日夜に入るや、正面に多くの発光信号が望見され、不安の空気が漂い始めた。

イ ソ蒙軍の攻勢開始…ソ軍式の速
戦即決

8月19日夜におけるソ軍の夜間爆撃は20日早晩に至り更に激化し、続いて熾烈な砲兵射撃が実施され、やがて、機甲部隊と狙撃兵の攻撃前進が開始された。

その攻勢は、ソ軍の「野外教令」に示されていた火力殲滅戦による包囲の方式によつたもので、両翼にも拘束正面にも、強大な航空機及び自走式又は機械化牽引式砲兵に支援され、且つ十分な重火器装備を持った機甲及び狙撃部隊を配置した。即ち、両翼にも正面にもそれぞれ相手の3倍程度の兵力を

配置して包囲の手を進めると同時に、正面の拠点を一挙瓦解させることにより、いわゆる速戦即決の目的を達成しようとしたのである。

8月22日第6軍は関東軍に、「ソ蒙軍の攻勢は各正面に兵力をバラまき一見重点なし」と報告している。

空地両面における優勢なソ蒙軍は初動の瞬間から日本軍を圧倒し、ことにフイ高地はたちまち四周を包囲され、またノロ高地南東の森田(徹)部隊は正面過広のため各大隊ごとに分断、包囲され、かくて戦況は第1日から容易ならぬ状態を示すに至つた。

第2次事件の作戦が開始されて約2カ月、わが第一線部隊は熾烈な砲爆撃を体験済みであったが、20日からの大攻勢における空地両面からする熾烈な砲爆撃と、優勢な戦車並びに狙撃部隊の近迫攻撃のすさまじさは、想像を絶するものであった。

ソ蒙軍の第一線は我に近接するや、多くの場合その進出地点に赤旗を立てるのを常としていた。戦場の通信は途絶し、四辺を覆っていた砲爆煙が薄らいで付近が見え始めるようになると、つい直前まで戦闘していたはずの隣接友軍の拠点到赤旗が立ち、次の瞬間にはそれが間隙に進み、翼側に入り、遂に背後に迫るようになるのであった。このような状況下において、僅かに

我を救つたのは夜間である。ソ蒙軍はしばしば夜間攻撃を続行したが、多くの場合、その第一線を若干後退させるのを例としていた。この時、我としては、局部のソ蒙軍を急襲して打撃を与え、あるいは少なくとも昼間途絶した上下左右に対する連絡を回復し、なお第一線の立て直しを行うことが可能であった。

なお20日以来のフイ高地に対するソ蒙軍の激しい砲爆撃は、はるか12、13km離れたバルシヤガル高地のわが陣地から望見することができ、同高地を守備していた将兵は、フイ高地がものすごい砲爆煙につつまれ、火柱が林立する有様を望見しながら溢れる涙を押さえ得なかったという。

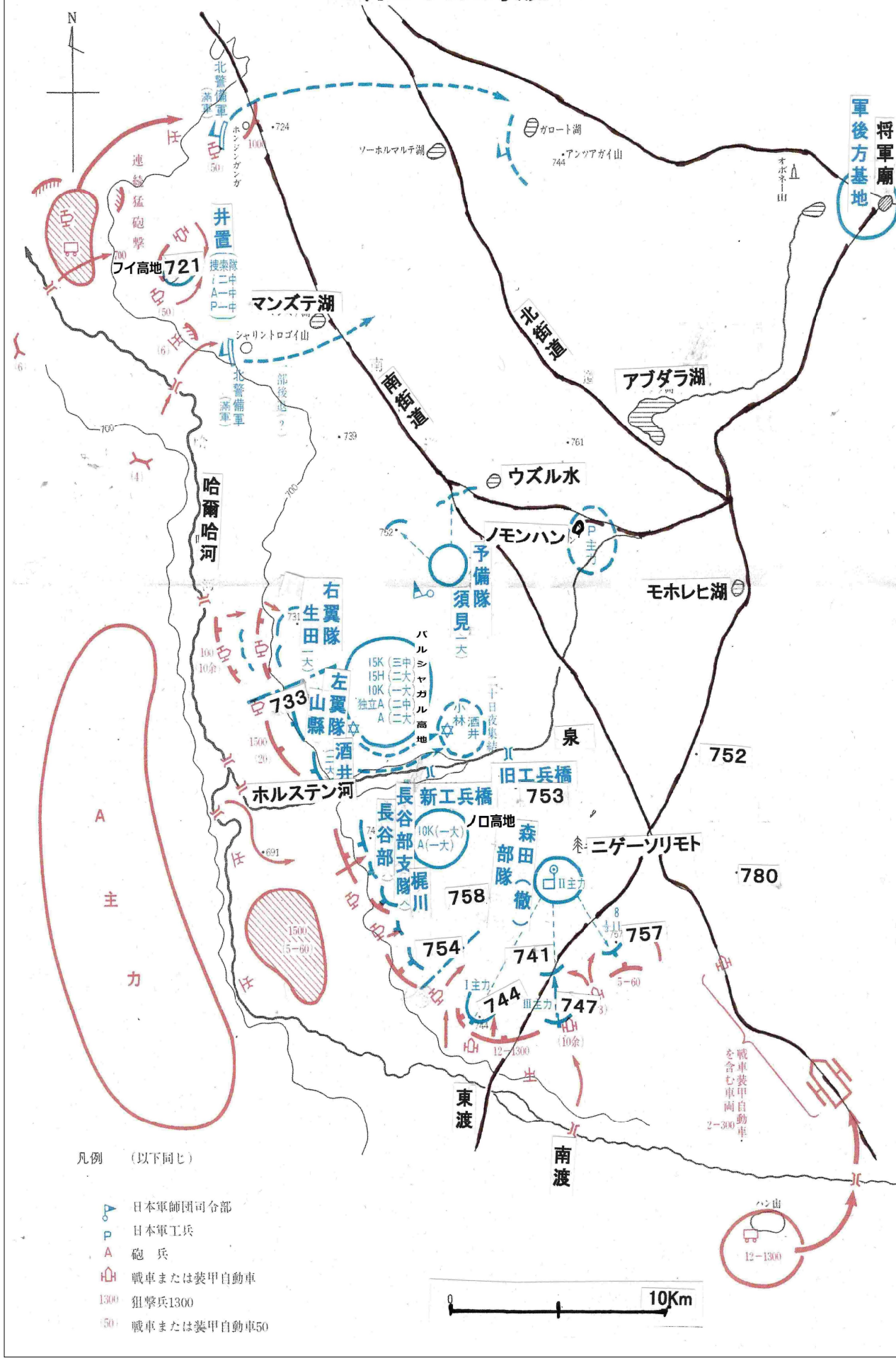
8月20日における彼我の状況は、付図のとおりである。

ウ 関東軍の判断、処置

ソ蒙軍の8月攻勢に関し関東軍司令官は、8月21日早朝、まず第23師団長から、続いて第6軍司令官からの報告に接した。これ等の報告を総合すると、ソ蒙軍が両翼包囲を狙っていることは明らかであり、また縦深戦力は、少なくとも狙撃3、4師団と機甲4、5旅団以上に及ぶものと推測され、それは驚くほどの戦況の激変であった。

しかし作戦課の判断には依然従来の先入観が残り、かなり事態を楽観して

8月20日の状況



いたようであった。関東軍機密作戦日誌には「・・・我として最も好い時期に敵が攻勢に転じたるものにして、この機会において敵を捕捉し得べきものと信じたり」と述べている。関東軍は、この時わが方の陣地がよほど強化され、第6軍の統帥も軌道に乗り、かつ既に戦場近くに進出している第7師団の一部を直ちに作戦に使用できるものと判断していた。しかしこれらは概して希望的観測か誤判に属するものであった。

第6軍司令部からは直ちに参謀長以下が戦場に進出したが、当時の第6軍参謀は状況に不慣れな点が多く、自ら判断・処置できる能力は十分ではなかった。

関東軍作戦課においては、8月上旬における事例のように、今回の場合もソ蒙軍の攻勢衝力は、その縦深補給能力の関係上、両3日後には急速に下火になるものと考えていた。しかし戦況はかえって一層熾烈の度を加えるばかりであった。ここにおいて関東軍司令官は、爾後の作戦の推移を案じ、攻勢転移の前日（8月23日）、第7師団主力を関東軍直轄のまま海拉爾に推進するとともに、独立守備1大隊と所要の通信部隊を第6軍に増強し、且つ矢野参謀副長、辻参謀を戦場に急派する処置を講じ、ついで24日の攻勢転移が不成功に終わったことを知るや、更に第

7師団主力を第6軍に編入するよう措置した。

また、25日辻参謀からの戦場発電報により、攻勢転移失敗を含む細部の戦況が判明するに及び、当面のソ蒙軍を撃破撃攘すべき新作戦に関し検討を進めることとなった。

この時、寺田高級参謀は、直ちに第2、第4師団を戦場に急派すべきことを強く主張したが、全満州の防衛に対する考慮上、暫く情勢の推移を見守る必要があるということで見送られ、25日夜、第6軍から至急兵力増強の要請電が届いてから、ようやくまず第2師団等、続いて第4師団等を増強するよう処置した。ここにおいても、まさしく戦力の逐次使用の弊を冒したのである。

(2) 日本軍の攻勢転移

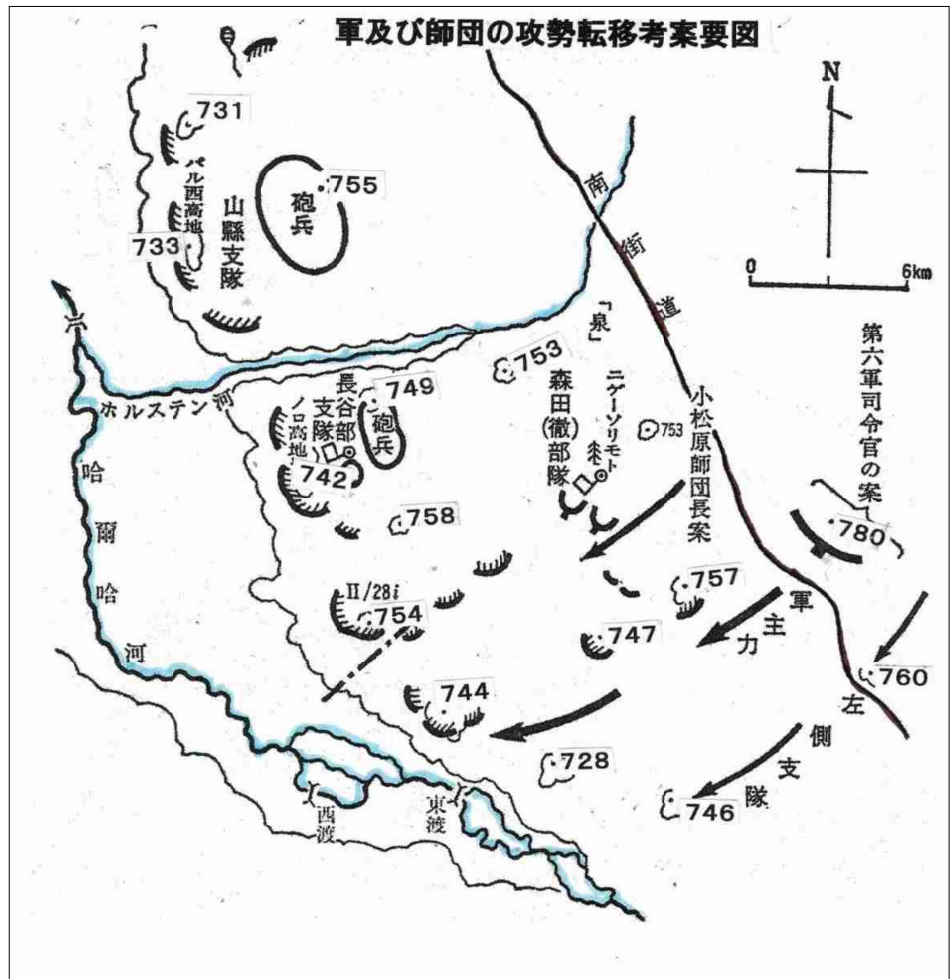
ア 軍、師団の攻勢構想

判断を大きく上回ったソ蒙軍の大攻勢に会しても、正面（最右翼フイ高地から最左翼757高地まで約37km）は縮小されず、攻勢転移は予定通り実行に移された。

第23師団長は、20日夜、攻勢転移準備のための命令を下達し、所要の部隊に爾後の攻撃を準備させた。

攻勢構想については、当時の戦況上なるべくノロ高地に近く攻撃前進しようとする師団案に対し、第6軍の構想

軍及び師団の攻勢転移考案要図



は、有力なソ蒙軍が南街道以北に行動中であったことなどから、更に大々的に780高地方面からソ蒙軍の外側を包囲することく出撃するというものであった。

軍参謀長、師団長、22日には砲兵団長をも加えて討議が行われ、午後になつてようやく軍の案により実行すること

イ 第23師団攻撃計画

師団の具体的な攻撃計画が示達されたのは、8月23日14時であった。その指導要領は、「フイ、バルシヤガル、ノロ各高地は、従来の配置部隊をもって確保し、爾余の攻勢部隊は、8月23日夜モホレヒ湖南方の予定地域に展開を終わり、24日払暁後、重点を左翼隊正面に保持して攻撃前進に移り、当面まず780高地東西の線に進出し、爾後更に態勢を整理したのち、757高地方面から744高地付近に進出する。左側支隊は主力の外側から760高地1746高地方面に向かい、ソ蒙軍の退路を遮断するとともに、哈爾哈河渡河点の確保に努める」というものであった。

これによって、初めて歩兵の展開線がモホレヒ湖南方約7km、752高地東西の線であること、協力砲兵は歩兵の展開線の北方に陣地占領すべきことが明らかにされた。なおこれより先、歩兵第14旅団長森田範正少将の率いる部隊は小松原師団長の指揮下に入られ、またそれまで師団予備であった須見部隊主力は森田(範)少将の指揮下に入り攻勢に参加するよう命令された。わずか一夜のうちに、歩兵約8大隊、野砲、重砲合計約12中隊が、数方向から新しい戦場に移動して展開し、しかも払暁攻撃のためあらゆる諸準備をし

なければならなかった。

なお、守勢方面の各守備隊は師団長に直結し、全般を統一する指揮官が置かれなければならないことがされたが、第6軍、第23師団の両司令部、第23歩兵団及び砲兵団司令部はいずれもモホレヒ湖付近に集まり、攻勢開始後は、ひたすらそ

の方面の作戦、戦闘指導に追われ、守勢方面を顧みる余裕がなかった。

そのため守備部隊は、各陣地とも圧倒的優勢なソ蒙軍の攻撃を受け、各個戦闘を余儀なくされ、失陥を早めることとなった。

ウ 展開位置への機動

攻勢部隊のうち、小林少将の指揮する酒井部隊(72i)主力は、8月23日夜ソ蒙軍の抵抗を排除しつつ、「泉」

にあたり、連隊長は758高地東側砂丘(俗称三角山)に第3大隊主力を移し、これをもって連隊の右翼の拠点とするよう意図した。しかし23日朝から三角山は、対岸砲兵の猛射と優勢な歩戦連合部隊の包囲攻撃を受け、大隊長及び大隊将兵の大部は壮烈な戦死を遂げ、またニゲーンソリモト南西側に集結した主力も、圧倒的優勢な敵のため完全に包囲されて猛射を受け、戦況は惨烈をきわめた。

歩兵第14旅団長森田(範)少将の指揮する諸隊が23日朝モホレヒ湖南側に到着した当時、ソ蒙軍の戦車部隊は既に付近に出没していた。部隊はこれを撃壊しつつ、じ後の戦闘を準備し、森田少将は同日2330、攻撃準備に関する左翼隊命令を下達した。

一方、砲兵団諸隊は、攻勢転移実施要領の概要を22日午後承知することができ、いち早く部署の概要を内定し、23日には地形偵察を行う等の準備を着々と進めた。しかし攻撃諸隊の機動が開始されたのは23日夜に入ってからのものであり、90式野砲及び重砲各主力の予定陣地進入は、夜暗のため錯誤が生じ、予期のとおりには進捗せず、戦闘参加は逐次加入の形とならざるを得なかった。

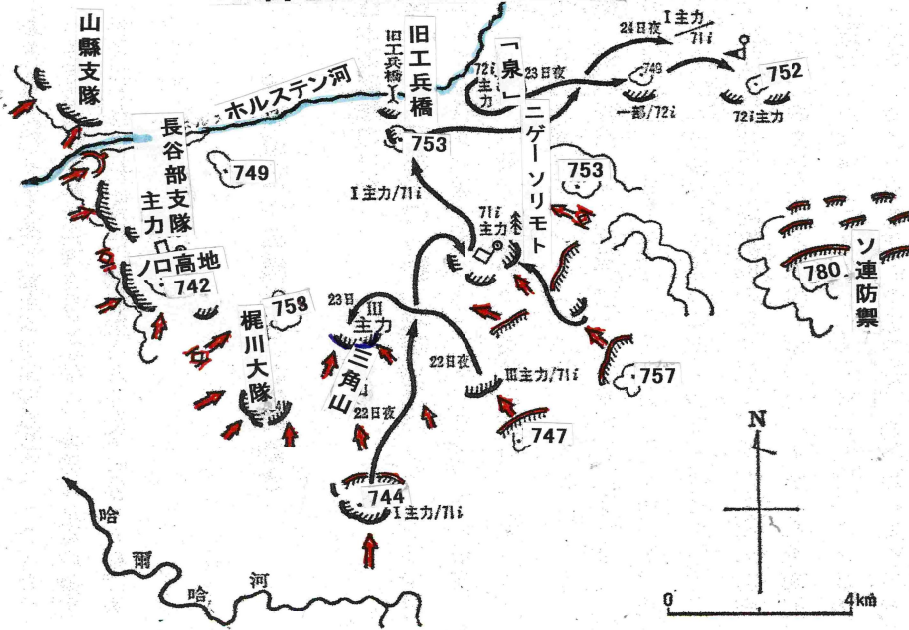
最左翼の森田(徹)部隊は、22日の師団個別命令に基づき、同日夜744高地及び747北西方砂丘等の拠点を捨て、758高地南東側からニゲーンソリモト南西方地区にわたる線に後退する処置を採った。

この新たな配備

エ ソ蒙軍による要域奪回先取

わが攻勢転移の第一目標である78

ノロ高地及び東側地区戦図概要図



0高地東西の線に向かつてきたソ蒙軍は、第80連隊／狙撃第57師団と戦車第6及び装甲第8旅団の主力とみられ、8月21日早くも780高地の直前に迫り、22日には780高地線北部の台端を占領し、工事に着手した。陣地は縦深に配備され分散秘匿に着意されていた。

また、優勢なソ蒙軍の一群は、ノロ高地南東側一帯に進出し、森田（徹）部隊を攻撃して744、747高地等の諸要点はもちろん、ニゲーソリモト付近の要域の大部をその手中に収めてしまった。

かくてわが左外翼からする攻勢転移にあたり、地形上最も重要な前進正面と右側台地の要点をソ蒙軍に制せられ、ホルステン河以南のソ蒙全軍を一挙制圧するに足りるほどの航空機、戦車、火炮並びに歩兵力を結集しない限り、攻撃の成功は望み得ない、という事態に陥ったのである。

なお彼我主力の展開並びに占領地の標高をみると、我の平均標高が740mに対し、彼は780mであった。彼我第一線の離隔距離は、約5km内外であつて、わが方はまたしてもソ蒙軍の火制下、展望下において長時間、相手方に暴露しながら攻撃せざるを得ない態勢に置かれたのであつた。

才 各部隊の展開

24日の攻勢予定の当日、正面のソ蒙軍が既に陣地を占領していたため、わが方は、払暁攻撃における基本的行動である、歩兵の攻撃準備位置への夜間推進、砲兵による攻撃準備射撃、歩砲の協同等を行う余裕がなかった。

また、右翼隊においては森田（徹）部隊主力が、左翼隊においては須見部隊主力がそれぞれ未着のまま、第一線歩兵の攻撃則進が開始されることになった。わが展開線からソ蒙軍の警戒陣地線まで約2・5～3km、780高地東西の第2主陣地線と思われる要線まで約4・5～5kmという状況であつた。

右翼隊の攻撃命令は0500に下達され、酒井部隊は0930諸準備を終わり、攻撃前進を開始した。

左翼隊にあつては、この日1000やや前、攻撃前進開始の旅団命令が下達された。

砲兵団においては、諸隊の機動が遅れたため、畑少将は来着する諸隊を逐次掌握しつつ各別に展開命令を下達し、初弾がソ蒙軍陣地にさく裂したのは1030頃であつた。なお当面の戦場におけるソ蒙軍の分散、遮蔽は徹底し射撃目標の発見、確認は容易でなかった。

力 攻勢部隊の戦闘経過

機に投じいわゆる「後の先」を取つて、一挙ソ蒙軍の撃滅を期したわが方の24日の攻勢転移も、結果において準備

不十分な陣地攻撃となつた。ソ蒙軍は780高地の陣地に我を拘束し、優勢な火力と戦車を巧みに運用して、わが攻撃部隊の両側並びに間隙から逆襲に転じた。

わが方は両翼隊とも大きな損害を受け、殊に右翼隊の戦力は半減以下となつて、爾後戦闘を続行することができなくなり、攻撃は左翼隊のみによって続行せざるを得なくなつた。

左翼隊は25日、砲兵の協力射撃に続いて第一線歩兵は、1300過ぎ攻撃前進を開始した。しかし歩兵が攻撃を開始するや、ソ蒙軍の火炮、重火器は猛火を我に浴びせ、第一線の攻撃は遅々として進まず、戦場は混沌たるうちに夜を迎えることとなつた。

結局左翼隊によるその攻撃も、25日昼間1回行われたにとどまり、かくて関東軍司令官以下多大の期待を寄せた攻勢転移は、事実上26日をもつて終焉せざるを得なかった。

キ 惨烈をきわめた守勢方面の戦況

第6軍の攻勢転移が発動された24日夜、ノロ高地から遥か30数km隔絶した最右翼のフイ高地がまず失陥し、続いて25日夜バルシヤガル高地の突角（731高地）にあつた須見部隊第1大隊長が壮烈な戦死を遂げ、残る将兵は直接山縣部隊長の指揮下に入った。

また、同高地にあつては、23日まで

ウズル水付近において、右側背を掩護警戒していた須見部隊主力が、同夜半攻勢方面に移動するや、それを待ち構えていたように有力なソ蒙軍の機械化部隊が背後から自衛力の少ない砲兵諸隊に襲いかかり、26日には10加、15加部隊はほとんど玉碎し、次いでその他の砲兵諸隊も、また歩兵の各陣地も、急速に戦力を失い、各隊一様に最後の関頭に立つ運命に至つた。

ク 攻勢転移の戦術的問題

8月24日から開始されたわが攻勢転移は、攻撃前進の方向こそ戦略的に大きくソ蒙軍の側背に向かうものであつたが、前面の高地帯には既に有力なソ蒙軍の歩、戦、砲の連兵部隊が進出し、陣地を固めていた。

これに対しわが方は歩兵も砲兵も逐次戦闘加入の方式により、しかも火力発揚のための準備を十分整える余裕がなく、そのため戦略的に優越した態勢を占める前に、まずソ蒙軍の戦術的対応策の前に屈せざるを得ないこととなつた。

わが攻勢転移が失敗した直接の要因は、攻勢兵力の寡弱、準備の不十分、縦深性の欠如（予備隊、第二線部隊の拘置、弾薬資材等兵站物資の集積不十分）などが指摘される。なお全般的には、ソ蒙軍の戦力に対する誤判と、攻勢開始まで4日間も貴重な時間を費や

し、そのため戦機を逸したことも重大な原因であったであろう。

(3) 攻勢転移失敗後の第6軍

ア 攻撃続行の企図

8月25日夜の戦況は、我にとつて極めて悲観すべきものがあつた。荻洲第6軍司令官は26日早暁、後続第7、第2師団その他の諸隊を戦場に投入し、従来の攻勢方面から攻撃を再興する意図を明らかにした。

攻撃続行のためには、バルシヤガル及びノロ高地は絶対確保を必要としたが、両者とも今やソ蒙軍の強圧を受け、ことにノロ高地方面の状況は憂慮すべきものがあつた。

攻撃続行の軍命令によれば、第7師団の来着とともに、森田(範)部隊を原所属(第7師団)に復帰させ、砲兵団その他を軍直轄とし、爾後第23師団をもつてホルステン河南岸の陣地を確保し、第7師団をもつて従来の攻勢方面からの攻撃を続行する、というものであつた。

ここにおいて第23師団長は、第6軍司令官の同意を得て、可能な限りの隷下諸隊の残兵を率いてノロ高地を救援するための行動を命じた。しかし第6軍司令官は、師団の行動開始直前になつてその行動を抑制した。

イ 第7師団の後退展開

26日夕における森田(範)少将の指

揮する諸隊は、780高地線付近のソ蒙軍陣地の直前に膠着し、その西側一帯には有力な戦車が横行する状況であつた。そこで第6軍は、8月27日朝までに集中を概了した第7師団主力をもつて、森田部隊の右翼に連係加入させることなく、約2km後方の749・752高地線(右翼隊当初の展開線)に後退展開させることにした。

しかし、第7師団は遂に29日朝まで攻撃を再興するに至らず、第6軍もあえてこれを督励しなかつた。第7師団の現有兵力では当面のソ蒙軍を撃破して780高地線の陣地を攻略し、ノロ高地東側に進出することは至難であると認めたからであらう。

26日夜ノロ高地の長谷部支隊は破断界に達して陣地を撤し、一方、小松原師団長は27日夜、バルシヤガル高地救援のため残兵を指揮して前進を開始した。

27日における第23師団長のバルシヤガル高地に向かう救援行に関し、当時の第6軍としては、前線にある第23師団諸隊に対し、命令によつて撤退させ、あるいは攻撃前進を中止させる必要を感じながら、第一線に立つ軍司令部として師団に対し戦場放棄を要求することが憚られ、遂に幕僚の誰からもその意見は出されず、折から軍司令部にあつた関東軍参謀副長も黙然として最後まで

でこの問題に触れることがなかつた。当時の陸軍の風潮の一端をしのぶことができよう。

第6軍司令官は、8月29日0800、「ノモンハン付近に兵力を集結し爾後の攻勢を準備する」に決し、第23師団長に対しては無線により「速やかに敵線を突破してノモンハンに向い前進すべし 吾等の責任は最後の企図遂行にあり この際自重し現状の如何に拘らず本命令の実行を厳命す」と命令した。しかしこの命令は容易に伝わらなかつた。29日夕刻第一線に残つたのは、山縣部隊の第1、第3大隊と、小松原師団長率いる救援隊だけとなつた。

(4) 第23師団長直率部隊の行動

8月27日夜、第23師団長は生き残つた師団の全員を率い、万死は期しても一つの生還をも望み得ないバルシヤガル高地に向かう前進の一步を進めた。出発直前、第6軍参謀長との間で必死の意見交換がなされたが、師団長の決心は変わらなかつた。26日夜の軍命令による第23師団の任務は、ホルステン河南岸陣地を確保すべし、というものであつた。師団長としてはノロ高地方面も気がかりであつたが、27日には既に第7師団主力が戦場付近に集中し、続いて同高地方面に向かう戦勢の進展が予測できるようになつたので、フィ

高地失陥後、絶対優勢なソ蒙軍の重圧を

受けていると思われるバル西高地(733)方面に向かつて前進することに決したものともみられる。如何に戦況が切迫しても任務を最も積極的に遂行しようとする気迫と、身をもつて部下の危急を救おうとする衷情の発露であつた。

昼間の前進はソ蒙軍の妨害のため不可能であつたので、行動は夜間を利用し、8月29日天明前目的地に進出した。時あたかも山縣大佐以下大部は入れ違いに戦場を離れ、わずかに残つた山縣部隊の第1、第3大隊も29日夜陣地を徹し、師団長を中心とするわずか千余の兵力が、怒濤の如きソ蒙軍の真只中に立つてバルシヤガル高地の一角を確保しようとしたのである。

8月30日、軍から一度ならず強硬な帰還命令が通達された。師団長としては、多数の戦没部下のあとを追ひ戦場に散る決意であつたが、戦況上敵陣地の数線突破が至難であると認めながらも、軍命令の趣意を体し最後まで帰還に対する努力と希望を捨てず、30日夜一瞬の戦機を看破して脱出行に移った。2日前、軍主力の前衛のような形で自ら率先して、既にソ蒙軍の充満する戦場に向かつて前進を開始した師団長は、軍命令に従つて黙々と脱出帰還の途についた。

(続く)

硫黄島における

遺骨収集活動について

令和4年度硫黄島戦没者遺骨収集
第3次派遣団員 倉内 繁光

私は令和4年11月20日から12月5日までの約2週間、硫黄島の戦いで亡くなられた日本人の方々の遺骨収集を実施しました。

南北8km、東西4kmの小さな島の硫黄島、東京から約1,250km離れ、グアム島と東京の中間地点に位置する硫黄島、この島に北飛行場、元山飛行場、千鳥飛行場の3つの飛行場が有り、米国側としては日本本土の爆撃を実施するため、是が非でも入手したい島でありました。

名将栗林中将はこれまでに硫黄島に住んでいた住民約千名を本土に移住させ、約2万1千名の日本陸軍の恒例の



遺骨収集活動の様子

戦い方であった水際作戦を止め、地下壕を掘り、頑強に抵抗を続け、日本本土への攻撃を少しでも遅くするという持久戦の戦い方に変更させたのです。このため「自決は避けよ、一人十殺（一人で十人は殺せ、それまで死ぬな）」という厳しい条件まで付けたという事でした。井戸を掘っても水が出ず、ただ単に雨水に頼るしかない兵士にとつて、また、固い地盤を掘ってもその熱気が湧き出す岩盤は戦う前から、それは地獄絵図でした。

硫黄島にはもともと海軍の地上部隊が配置されていたのですが、海軍はこれまで海軍地上部隊が米軍と戦ったように、米軍の着上陸作戦を迎え撃つ作戦を実施する計画でありました。陸軍は急きょ硫黄島に派遣されたため、人員、装備はあるものの、コンクリート等の物資がありません。そのため、栗林中将は海軍からコンクリートを調達するため、海軍からの要請により、形ばかりの砲台を米軍の着上陸予想地点にいくつか作成し、大部分は地下壕の作成に使用しました。摺鉢山から元山へ約26kmの地下壕を作成する計画でありましたが、前項の海軍の要請による砲台の作成のため、米軍の攻撃が始まるまで18kmしか作成できず、これが最終的に大きな失敗となりました。

米軍は昭和20年2月19日、突如、硫黄島南部東海岸に昼夜にわたり3日間の圧倒的な艦載機と艦艇による砲爆撃

を実施し、その後、米海兵隊3個師団による上陸作戦を実施しました。これに対し、日本軍は当初は抵抗せず、米軍が上陸した後に反撃を開始しました。このため米軍はこれまでの日本軍の戦い（米軍が着上陸したら数日間は反抗し、その後突撃を実施し、最後は全滅する）とは勝手が異なり、日本軍は周到に準備した壕を活用し、米軍に大打撃を与え、最終的には硫黄島の日本軍の全滅まで35日要しました。

今回の硫黄島における私の遺骨収集参加は5回目ではありますが、毎回毎回緊張の連続です。ご遺骨があると予想される区域を少しずつシャベルで掘り起こし、土砂をふるいにかけて、ご遺骨を探します。どんなに小さいものでも一辺でも逃さないように皆真剣そのものです。当時は米軍の砲爆弾が飛び交う中で、どのような状況だったのか、また家族を思い日本のために自分が盾になるのだと生きがいを持って戦った兵士の事を思うと、思わず涙が出てきます。今回その努力の成果もあり、全部で29柱が発見されました。これまでに参加した中では、最大の成果であります。

厚生労働省は5年ほど前から、遺骨収集メンバーの他に人類学者あるいは考古学者を加えております。これは発掘した遺骨の状況を識別するのと、できれば死亡した時の状況、血液の識別等により亡くなられた方の遺族へ橋渡

しのために実施しているものであります。発掘されたご遺骨の亡くなられた状況を解説していただきましたが、亡くなられた人の年齢、戦死した時の状況等が推定され、非常に感慨深いものがありました。

掘り起こされたご遺骨は土がついたり、泥をかぶつたりしているため、仮安置室に収める前に洗骨を行います。ご遺骨は何も語りはしませんが、「掘り出してくれてありがとう。やっと俺も本土に帰れる」と言われているようで自然と涙が出ました。

日本を守るため、家族をまた親兄弟を日本に残し、この前線において善戦敢闘し命を落とされた英霊に対し、ただただ感謝を申し上げるしかないと思います。

今後も遺骨収集のために限界はあると思いますが、機会を見つけて活動していきたいと考えております。



令和4年度硫黄島第3回派遣団員

事務局からの報告等

一 令和4年度第2回通常理事会開催

3月9日(木)、当協議会会議室において令和4年度第2回通常理事会を開催しました。

本会議では、事務局から提出された議案等について熱心な討議が行われ、事務局案はそれぞれ原案通り承認されました。

(一) 議案等

①第一号議案…令和5年度事業計画書等

②第二号議案…令和5年度の財産運用について

③第三号議案…令和4年度下半期職務執行状況

④第四号議案…顧問の選任について

⑤連絡事項及び懇談会

- ・次回理事会及び定時評議員会の概要
- ・理事及び監事の選任案について
- ・会長人事について

(二) 出席者

理事10名中9名 監事2名が参加

二 慰霊祭等への参加状況

①1月14日、乃木神社凱旋記念祭に理事長が参加

②3月4日、JYMA日本青年遺骨収集団慰霊祭に事務局長が参加

③3月25日、第44回特攻隊全戦没者慰霊祭に専務理事が参加

三 硫黄島戦没者遺骨収集派遣参加

第4回硫黄島戦没者遺骨収集派遣に水交会から1名が参加されました。

四 新入会員紹介 (敬称略)

(令和4年12月16日～5年3月20日)

【賛助会員】

植木 茂光 國嶋 健一

賛助会員2名

五 靖國神社永代神楽祭のご案内

永代神楽祭は会員の高齢化等で慰霊祭の斎行が困難になる中、「大東亜戦争全戦没者」を慰霊顕彰するため、靖國神社によつて毎年4月28日、永代にわたり祭祀をしていただけるものです。令和5年4月28日の神楽祭に参列を希望される方は事務局までご一報下さい。

なお、奉奏日の4月28日はサンフランシスコ講和条約が発効し、我が国の主権が回復した日であり、大東亜戦争の国難に敢然と立ち向かわれたご英霊の勇氣と献身を思い起こし感謝するよい機会になると思っています。



会費納入のお願い

当協議会の活動は、会員の皆様の会費・寄付金等の浄財で成り立っております。

令和5年度年会費納入用の払込取扱票を「慰霊第58号」に同封しておりますので、会費納入にご協力をお願い申し上げます。

新規会員獲得への協力をお願い

当協議会は、民間有志会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永続と充実を希う、多くの皆様の当協議会への入会を心からお待ち申し上げております。

既会員の皆様には、お知り合いの方の入会勧誘について、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会員の区分と年会費は 次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)
年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別御芳志の賛助会員)
年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)
年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する企業・法人団体)
年会費 一口一〇〇〇〇円

(一口以上)

*振込先口座番号(郵便振替口座)

〇〇一四〇・六・三三四九三〇

(当協議会へ事前に連絡をいただければ、振込料無料の振込用紙付「入会のしおり」をお届けいたします。)

協議会参加正会員団体の令和5年度慰霊行事予定 (情報入手分のみ)

(各会員団体が主催又は参加する主要慰霊行事を掲載しています。)

年月日	時間	慰霊行事名	場所
(公財) 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会			
5・4・28	14時00分	大東亜戦争大戦没者永代神楽祭	靖国神社
5・7・8	式典12時00分	令和5年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭	靖国神社
(公財) 海原会			
5・5・28	11時00分～12時00分	第56回予科練戦没者慰霊祭	陸自土浦駐屯地内
英霊にこたえる会			
5・8・15	9時00分～10時00分	第48回全国戦没者慰霊大祭	靖国神社
エラフ力東京都人会			
5・7・8	式典12時00分	令和5年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭	靖国神社
(公財) 偕行社			
5・4・17	式典10時30分	第2回偕行社慰霊祭	靖国神社
鹿児島偕行会			
5・8・15	11時00分～12時00分	大東亜戦争戦没者慰霊祭	鹿児島護国神社
6・3・31	10時30分～11時30分	鹿児島戦没者墓地慰霊祭	鹿児島戦没者墓地
神奈川県偕行会			
5・8・15		神奈川県戦没者追悼式	神奈川県慰霊堂
熊本偕行会			
5・11・5	11時00分～13時30分	合同慰霊祭	熊本縣護国神社
埼玉偕行会			
5・5・14	10時30分～11時00分	埼玉縣護国神社正式参拝	埼玉縣護国神社
5・8・15	11時30分	埼玉縣護国神社みたま祭	埼玉縣護国神社
5・10・31	11時30分	埼玉県特攻隊慰霊祭	埼玉縣護国神社
特定非営利活動法人JYMA日本青年遺骨収集団			
6・3月	10時00分～15時00分	JYMA慰霊祭・活動報告会	靖国神社

年月日	時間	慰霊行事名	場所
全国ソロモン会			
5・10・21	11時00分～12時00分	ソロモン群島方面戦没者慰霊祭	靖国神社
5・8・4	5・8・10	ガダルカナル島戦80年慰霊巡拝	ガダルカナル島
筑後地区偕行会			
5・5・8	10時30分～12時00分	久留米市戦没者慰霊祭	野中町忠霊塔広場
5・8・15	10時40分～12時30分	戦没者慰霊平和祈年祭	野中町忠霊塔広場
6・2・22	11時00分～12時00分	爆弾二勇士慰霊祭	山川招魂社境内
(公財) 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会			
5・10・18	13時00分～14時30分	秋季慰霊祭	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
東部ニューギニア戦友遺族会			
5・4・5	14時00分	靖国神社永代神楽祭奉斎	靖国神社
(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会			
5・9・23	14時00分～16時30分	第71回特攻平和観音年次法要	世田谷山観音寺
6・3・23	11時00分～14時30分	第44回特攻隊全戦没者慰霊祭	靖国神社
ネービー21			
5・6・5	14時00分～15時00分	ミッドウェー海戦80年祭	靖国神社
5・9・25	14時00分～15時00分	堀内豊秋永代神楽祭	靖国神社
6・1・5	14時00分～15時00分	永野修身大将永代神楽祭	靖国神社
ハワイ明治会			
5・8・15	9時00分	盆法要	ハワイマキキ日本海軍墓地
6・3・20	9時00分	招魂慰霊祭	ハワイマキキ日本海軍墓地
福岡県偕行会			
5・5・13	10時00分～12時00分	福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭	福岡縣護国神社
5・10・15	10時00分～12時00分	福岡陸軍墓地慰霊祭	福岡陸軍墓地
宮崎県偕行会			
5・4・6	10時00分～11時00分	特攻慰霊祭	都城市陸軍墓地
5・7・21	10時00分～12時00分	宮崎県山身戦没者慰霊祭	宮崎縣護国神社
5・8・15	10時00分～11時00分	大東亜戦争戦没者慰霊祭	宮崎縣護国神社
山口県偕行会			
5・4・29	13時00分～14時00分	防長英霊塔慰霊祭	防長慰霊塔
5・8・8	11時00分	献灯みたままつり	山口県護国神社
5・11・19	14時00分～15時30分	山口県陸軍墓地慰霊祭	山口県陸軍墓地